



## 「CVV 的生活」のすすめ

黒山 泰弘（元 大阪市）

### 1. はじめに

市職員や市関連団体職員であった「かせぎの世界」から完全に離れてから数年たちます。家に引きこもるのが嫌で、「土木」に触れられるネタを見つけながら暮らしていますが、それを「CVV 的生活」と勝手に名付け実践しています。本稿ではその一端をご紹介しますと思います。

### 2. 自己紹介

1952 年生まれです。1977 年に大阪市立大学工学研究科修士課程を修了して、大阪市に採用され、土木局土木部橋梁課に配属となりました。実務担当時代は橋梁、地下街・駐車場などの地下構造物の設計施工などを担当しましたが、その時期には担当業務の設計施工内容の土木関連雑誌への投稿や研究者と共同で実施した調査研究成果を土木学会等で発表したりしていました。

橋梁課時代は当時の若手研究者との議論を通じて維持管理の重要性を感じ、今のような ICT 環境にない時代に橋梁維持管理データベースの構想を夢想しました。

その後、2 つの地下街建設を担当しましたが、今後大阪では地下街の新設はほぼないと思うので珍しい存在と自認しています。

変わった担当業務としては大阪で花博を開催した 1990 年に「国際水都首長会議」という水・緑をテーマとする国際会議の事務局員をやったことです（語学力不足なのに！）。

管理職赴任後も、2 年間の経営企画室勤務以外は建設局において街路・道路・河川事業に従事しました。2011 年 3 月末大阪市を退職し、その後市関連団体やエリアマネジメント団体に勤務を経て現在（2022 年 3 月現在）は年金生活者です。

### 3. CVV とのかかわり

上記で紹介した「当時の若手研究者」に市大土木出身で研究室の先輩である谷平先生がおられます。市を退職した頃、当時 CVV 幹事長であった先生から「退職して時間があるだろうから CVV の活動を手伝ってくれないか」と誘われました。頼まれると「いや」となかなか言えない悪い癖があるので、お手伝いくらいならと気安く引き受け、その後はずるずると、また活動のネタを考えることが楽しくなってきたので、今では事務局（雑用係）、土木学会関西支部との窓口役を引き受けています。

### 4. 「CVV 的生活」のためには

私が考える「CVV 的生活」を皆さんに考えていただくための参考とすべく、2016 年 10 月に「土木学会教育企画・人材育成委員会 成熟したシビルエンジニア活性化小委員会」のインタビューを受けるにあたって整理した文章をご紹介します。

#### ① 大阪市を退職後、携われている仕事以外での社会活動を教えてください

- ・ 実務時代は土木学会などの学協会に積極的に関与してきましたが管理職になると関係は疎遠になりました。

- ・ 市退職を機に時間的余裕ができたこと、自治体職員の学会離れが進んでいることへの危機感、土木に少しでも貢献したいこと、などから、2011年6月から3年間土木学会誌編集委員会に参画しました（その後も2年間関わったので計5年間編集委員を務めました）。
  - ・ その間東日本大震災後の様々な取り組みや「思い」の連載をはじめ、社会資本の維持管理問題、観光と土木、地下空間活用など幅広いテーマの特集を担当しました。新たな人的つながりを得て土木の面白さを再発見しました。また、今でもその人とのつながりは継続できています。
  - ・ 土木に関係する活動としては、関西在住の土木技術者（主として企業・官公庁の退職者と大学人）で組織するCVV（シビル・ベテランズ&ボランティアズ）という任意団体に参画しており、代表・幹事長を補佐する事務を担当しています。また、近畿大学や大阪市立大学の非常勤講師を数年勤めました。関西道路研究会（関西の自治体・研究者・道路関連企業で構成される任意団体）や関西支部の土木遺産選定委員会などに関わっています。
- ② 退職後において、仕事やボランティアなどの社会活動を続けていくにあたって、心がけていることがあれば教えてください。
- ・ 現役世代の邪魔にならないこと、土木の楽しさ・大事さを可能な範囲で土木以外の人も含んで広く伝える活動に取り組むこと、自分が楽しいと思うことをやること、などです。
- ③ これまでを振り返り、身に付けておいた方が良かった（もしくは身に付けておいてよかった）と思う経験、スキルはどのようなものですか？
- ・ 語学につきます。
- ④ 仕事やボランティアなどの社会活動について今後も続けて行かれますか？
- ・ 仕事は誘ってくれる方がいなくなればやめます。
  - ・ ボランティア活動は元来アウトドア一派なので外での活動を優先して体力の限界を感じるまで続けたいです（森林整備のボランティア活動に現在関わっています）。
  - ・ CVVなど土木にこだわった活動も継続したいとも思っています。
- ⑤ 個人が、継続して働き続けることに対して、組織や社会的な障壁などを感じられたことはありますか？
- ・ 私個人は感じたことはありません。
  - ・ しかし、女性や障害者への制約は感じますし、自身が制約に加担していたこともあるかもしれません（反省）。
- ⑥ 現在のお立場等で、次の世代へ世代交代、技術継承をするにあたって、何か心がけていること・希望することがあれば教えてください。
- ・ 土木を学んだ頃（1970年頃）が高度成長期の最後の時代、また、就職し実務を取り仕切れる係長級になった頃はバブル期前後と公共（政治や行政）主導で社会資本整備が可能な時代を永く経験しました。その頃は建設することを前提に補助金・予算を確保すること、地元住民を説得することが大きな仕事でした。
  - ・ しかし、バブル終焉以降は様々な主体と合意形成を図ることに精力を傾けなければならぬ時代となりました。
  - ・ 時代とともに土木技術者が担当する業務内容も大きく変化します。また、土木と一言で言

ってもその担当するエリアは（最近特に）すごく広がっています。

- ・ しかも、計算技術・通信情報技術などの発展で以前なら空想の世界であったことが現実となっていますし、工学的技術も高度化・複雑化しています。したがって、土木技術者の役割も時代に応じて変わっていきます。
- ・ 最先端の工学的技術を追求する気持ちは常に持っていただきたい。また、(工学的知識だけではなく社会科学や人文科学などの) 幅広い知識を持った上で技術的判断をしていきたい(していってほしい) と考えます。
- ・ さらに言うと、美しい国や地域に旅してもらいたいことと、コミュニケーション(対話や会話)を楽しんでももらいたいです。

⑦ 思い出深いプロジェクトやエピソードがあれば、教えてください。(できれば年代別に)

- ・ 新規採用当時の係長の指導で、「いやいやながら」雑誌への投稿や学会発表などで文章をたくさん書きました。そのおかげか管理職になった頃は、数人の方から「わかりやすい文章を書く」とほめられて「大きな喜び」を感じました。
- ・ その後、地下構造物を担当していた時、設計施工にかかる技術委員会において事務局・説明者として走り回っていました(結構頭も使いました)。当時の局長(工学博士で仕事の面でも土木技術者としても尊敬できる方です)も委員として参加されていましたが、数回目の委員会終了後のトイレで局長から説明のわかりやすさをほめていただきました。また、そのことを座談会(外郭団体の記念事業として出版された記念誌に掲載)でも取り上げていただきました。大変うれしかったですし、自信になりました。
- ・ いろいろな意見があると思いますが、やはり土木屋はモノを作っているとき、その維持管理に真剣に取り組んでいるとき、が楽しいのだとつくづく感じます。
- ・ それほどの知識・経験はないですが、若手の頃に担当した橋の仕事の楽しさが忘れられませんが「橋オタク」を自任しています。今でも橋のことが話題になると「ちょっかい」を出したくなります。
- ・ そのような意味から、好きな分野を作ってもらえれば継続できるのではと思います。

⑧ 若いころに考えていたこと、また今思えば何がやりたかったか?について教えてください。

- ・ 就職をまじめに考えた時期は海外勤務が可能な企業に入りたいと思っていました。能力不足(特に語学)が最大の理由ですが、就職難の時代で企業が採用を控えていたこともありありませんでした。景気のいい時代だったら全く違った土木屋人生(土木を離れていたかも)になったと思います。
- ・ そうなっていれば(「たれば」ですが)今頃は JICA 海外シニアボランティアに応募していたのではと夢想しています。

⑨ これからの目標がありましたら、お教えてください。

- ・ 超高齢社会になっていますので(同世代人の皆さんが感じていることだと思いますが)「いくつまで生きるのか、それまで家族を含め周りの方に迷惑をかけないで生活できるか」が心配ごとです。でも、考えても仕方がないことなので、「一年一年、やれること・やりたいことをやる」をモットーに生活したいと思っています。

⑩ 最後に、これから定年退職を迎えられる世代のシビルエンジニア(メインの読者)に、メッ

ページがあればよろしく申し上げます。

- ・ 「成熟したシビルエンジニア活性化小委員会」のHPを拝見しました。登場されているのが技術者として立派な方ばかりで気後れし、できれば登場したくないとも感じますが、上記CVVでの活動を続ける中で感じる・感じたところを以下に記述します。
- ・ 現在の日本の雇用・年金システムから65歳がシニアと現役との境界となっています。この件に関しては賛否があると思いますし、年齢で判断するのは不合理だと考えますが、私ももうすぐその時期を迎えます。
- ・ 体力・気力等に衰えはあるもののまだ健康で元気なので活動（仕事）を続けたいと思うシニア層は少なくないと思います。しかし、私は「現役世代の邪魔をしない」・「足手まといにならない」・「意思決定は現役世代に任せる」、といった点をシニア層が守ること、すなわち、あくまでも「シニア層は現役世代から求められることを手伝う存在であること」が大前提であると常に意識しています（しっかり守れている自信はありませんが）。
- ・ そのため、現役世代の方々からの「何をシニア層に求めるのか」についての発信を期待しますが、実態はあまり多くないように感じます。小委員会HPに掲載されている玄間千映子委員の記事（“OBシニア“は、宝の山 - 職場における高齢者の参加の形を考える - 特に4章「”OBシニア“の、指南のコツ」）はヒントを与えていただきました。
- ・ 「・・・現役世代は必ずしもシニアの話を学習材料だと受け止めることは少ないようで・・・（中略）・・・彼らに耳を傾けさせるには、コツがあるように思う。シニアが語る経験談は、自分が主役になるものが多いようだが、ここでの目的は「”質”をカスタマイズする」という能動的な姿勢の取り方を伝えることにある。」「”経験を継承する”とは、・・・（中略）・・・場面への対応よりも前に行っている解釈の仕方を伝えることから始めることが必要だ。」「話し手の行動の内容に関心が持てるのは、話し手と同じ目線に立って眺めることができること。まずは背景、そして理由、それから行動という話の組み立て方にする・・・」、「今回・・・紙面に登場された方々は・・・「相手が求めるものは何か」、「使う側の視点で考える」ことの大切さ、「相手の側に立って仕事を進める」ことの大事さを語っておられる。そうであるなら、相手が求めているものを「どうやってキャッチしたか」を、まずは是非とも現役世代に伝えてほしい。日本が他国に誇る「”質”をカスタマイズする力」という労働特性は、そういった目線から生まれてくるものだと思う。」
- ・ このような現役世代からの発信をさらに期待します。シニア層もしっかりと現役世代からの発信を受け止めて活動する必要があります。

##### 5. おわりに

雑文を最後までお読みいただき感謝します。地方自治体職員（公務員）OBなので、かっこよく言うと「世のため人のため」という意識が染みついています（実践できているかは別問題です）。これからも、体力・気力が続く限り趣味の街道歩き、登山とともに、CVVをはじめとする土木に関わる社会活動に関わっていきたいと考えています。

<参考資料>

[【インタビュー記事】シニアに学ぶ『退職後の輝き方』 | 土木学会 教育企画・人材育成委員会 成熟したシビルエンジニア活性化小委員会 \(jsce.or.jp\)](#) 土木学会ホームページより